

第四章 価値

私たちの生命の活動は、常に何かしらの意味と価値を創造する営みである。この世に生まれ落ちてから死ぬときまで、意識場においては間断なく意味と価値の創造が繰り返される。

「夜と霧」の著者として有名なオーストリアの精神科医、心理学者のヴィクトール・エミール・フランクル（一九〇五～一九九七）は、私たちが生涯行なう価値の創造活動を三つに分類し、それぞれを「創造価値」、「体験価値」、「態度価値」と命名した。創造価値は人間が世界の内に、活動や行為によって実現する価値である。体験価値は人間が世界を受容して自然や芸術などを経験として味わうことによって実現する価値である。態度価値は人間が避けることのできない運命や苦難に直面した際に、それを如何に引き受け、そして、如何なる態度を示すかによって実現する価値である。人間は世界にはたらきかけることによって創造価値を、世界を受容することによって体験価値を、世界に示す意志や態度によって態度価値を実現する。

人間が日々の営みの中で築き上げるこれらの価値群の根底には、生命そのものの価値、絶対的な命の価値というものが存在しなければならない。私たちの価値を経験して創造する営みは、命の根源的尊厳性を前提としたものでなければならない。統合場の立場から述べれば、命はその本質においては無限無量の絶対的価値を有している。この絶対的な価値の上に、相対的で多元的な意味と価値の体系を形成していかなければならない。

四章一節 絶対的価値

日常生活の中では、私たちは身体を基軸とし、感情体験、思考作用、反応や行動によって意味付けや価値付けを行なう。私たちは意識場の中に、本能的／精神的、個的／社会的、即時的／歴史的といった様々なレベルでの固有の意味と価値の体系を創造し、自分自身が形成したその相対的価値体系の中で、自己をより充足させる方向を目指して活動する。命はただ生きるだけでなく、その命の活動をより充足させることに意味と価値を見出す。

このような（相対的な）意味と価値の創造活動は、仏教の言葉で言えば「分別智」に相当するであろう。しかしながら、絶対的な価値は分別智ではなく、「無分別智」によ

って与えられる。感情経験や思考のはたらきを超えたところの心の純粹性質の中において、それは把捉される。すべての相対的な正誤の判断や価値基準を超えたところの、一切空のただ中において、命そのもの、生の根本事実、最も純粹に直接につかまれる。この絶対的価値認識の中には、「一」と「二」の区別は無く、「一」と「多」の区別も無い。絶対的な命の本質のただ中に存在するのみである。そこにおいて生命の本来の意味、生死の本当の意味が直観的に把捉される。

この絶対的な価値の観点が新たに加わることになれば、それまで日常の生活の中で創造してきた（相対的な）意味と価値の体系、および、その中での意味と価値の充足活動には、根本的な変革が生じる。自己を取り巻く世界はそのままでありながらも、そこには新たなる次元からの意味と価値が加わることになる。宗教学者の岸本英夫氏（1903～1964）は、このような東洋的な価値観の変革について、次のように説明している。

究極的価値は、当事者たちの主張するところによれば、観念的な主知的理解をこえた特殊の直観的価値である。この価値が加わると、全人間の価値体制の色調が変わって来る。人間の心に、新しい世界が展開する。その新しい価値体制を基盤にして、深い生命の意味が開ける。この究極的価値自身は、すべての象徴体制をこえることのできる直観的なものである。思想をも超えている。

しかし、この究極的価値は、それが体得されたからといっても、それによって、日常生活の、客観的条件が変わるものではない。与えられた環境的条件は、そのままである。人間に生理的变化や、感覚異常が起こるのでもない。感覚的な苦痛は、やはり苦痛である。快感は快感である。それらは、そのままでありながら、しかも、もう一つ、いわば、次元の異なった別の領域から、究極的な価値が展開するのである。

禪家は、これを「柳は緑、花は紅」という。悟る前も、悟ったのちも、柳は同じようにミドリであり、花はクレナイである。柳や花の、外的条件は、そのままでありながら、しかも、悟ったのちには、柳も花も、今までとは別の価値をもって把握される⁽¹⁾。

（相対的）価値は日常生活においては、五蘊の色（^{しき}身体）を基軸とした、受（情動、感情）、想（概念化、意味処理）、行（欲求、意志、行動）によって形づくられるが、究極的な価値は、それらが一掃されたところの心（識）の純粹性質の中において自覚される。この「存在と認識」の根源性と純粹性の自覚の中で、それまでの相対的な意味と価値の体系は再編成されることになる。世界と自己に対しての新たなる視点での理解が生まれる。

四章二節 良心

私たちは実生活の中においては、個と個、命と命との交わりによって、他者の命の尊さ、その存在の価値を知る。感情と感情、精神と精神、魂（五蘊）と魂（五蘊）が、直に触れ合い、相互に共鳴し合うことによって、他者を知り、愛し、その命をかけがえないものとして慈しむようになる。それは与えられた概念や、標榜する理念などではなく、自らの経験としての他者の命の尊さの自覚である。経験として他者の命の重みを自覚するようになれば、その命は、他の無数の命とは異なり、決して換えることのできない、唯一無二な存在へと転じる。この瞬間における命と命との交わりは、この広大な宇宙の時空間の中での奇跡的な出会いのように感じられるかもしれない。

日常生活において、神や仏のような絶対者の視点を持たない私たちは、他者の命の価値を、個人的な視点あるいは相対的な立場から把握するしかない。他者と直面し、五蘊の共鳴する程度や度合いによって、他者の命の尊厳性を経験的に知るようになる。ふつう人は見ず知らずの他人の命よりも、実際に五蘊を共鳴し合える知人や友人の命のほうを大切に思う。敵や憎むべき相手の命よりも、より豊かに五蘊を共鳴し合える仲間や親しい者の命のほうを大切に思う。そしてまた人間は、あらゆる生物の中でも、五蘊のすべてをもって共鳴し合える同じ人間を最も大切に思う。人間は誰よりも何よりも同じ人間の五蘊を尊重して愛する。人間の精神は人間の精神と最も豊かに共鳴し合うことによって、その命の尊厳性を全人格をもって如実に知ることになる。

現実生活においては、人間は個々の立場から、他者の命の価値を捉えている。私たちは自我（五蘊）の活動によって、経験として他者の命の価値を自覚する。したがって、この現実世界においては、私たちの他者を慈しみ哀れむ心情（慈悲）の及ぶ範囲は、人間の自我の活動を中心とした限定的で条件付きなものとなる。現実、命の価値の自覚が及ばないところに、慈悲は顕在化しない。

本書の統合場の立場から述べれば、あらゆる命はその本性としては無限無量の根源的尊厳性と平等性を備えている。その無限無量の命の価値の自覚は、私たちの相対的で限定的な慈悲のはたらきを、より深く広く伸展させることになる。この世界においては、私たちの命の価値の自覚は、自我（五蘊）の活動の範囲に矮小化してしまっているが、命はその本性として、この矮小化した価値認識を無限無量に深め広げようとする。そのはたらきは、親しい人々だけでなく、憎しみ合う人々に対しても、命の価値の自覚を促す。また、自分が所属する一部の人間集団だけではなく、あらゆる人間の命の価値の自覚を促す。そしてさらに、人間という枠組みを超え、互いに生かし合う生命の尊厳性の

自覚をも促す。非人間の命を、ただ効率的に機械的に利用するだけでは無く、同じ苦しみや痛みを感じる者、より充実した生命活動を望む者として、その生命を尊重し慈しむべきであると諭す。それは一部の親しいものしか愛せない私たちに「あらゆるものを愛せよ」と静かに語りかける、心の奥底からわき起こる義務感のようなものとして感じられるかもしれない。その心の奥底からの声なき声は、私たちの「良心」の基盤となる。

四章三節 自覚

幸福

命と命の交わりは、私たちに「幸福」をもたらす。五蘊と五蘊が豊かに共鳴し合う結果、命の躍動する喜びの感情である幸福が訪れる。命と命の交わりにおいて、その命が尊く、価値のあることを知ったとき、私たちは幸福な者となる。この他者の命の尊厳性の理解は、それが無条件であればあるほど、幸福感はより深いものになるようである。母が我が子を想うように、ただそこにいてくれることへの感謝、存在そのものへの感謝は、心の奥底からの幸せを生む。私たちは、ただ一つの命の価値を知ることだけでも、世界を価値に満ちたものとして自覚するようになる。

しかしながら、五蘊の活動が生死を伴うものである限り、やがては愛する者の死に直面する機会は訪れる。それは悲しみと苦悩を伴う、喪失の体験となる。その命が大切なものであればあるほど、その喪失体験は深く耐え難いものとなる。愛する者の存在によって価値に満たされていた世界は、その光と輝きを喪失する。

私たちは生死を伴う命と命との交わりの中で、その命の価値、重みを、幸福と悲しみの体験によって知ることになる。愛することによって、そして、失うことによって、命を見つめる眼差しは深くなっていく。

理解

命と命、五蘊と五蘊は交わることによって、心地よい協和音では無く、不愉快な不協和音を響かせることもある。五蘊の内は喜びや幸福ではなく、怒り、憎しみ、嫉妬、恐怖といった否定的感情で満たされ、そこには不愉快な不協和音が響き渡る。そうなれば五蘊は、他者の命の価値を認め高めるのではなく、むしろ、不協和音の原因となった他者の価値を低め貶めようとする方向に進み始める。個人の場合あるいは社会の場に出来上がった不協和音がおさまることなく増していくことになれば、私たちは憎悪の渦に放り込まれることになり、その解決を求めて、互いの存在を排除し合うようになる。

しかしながら、もし私たちが命の絶対的な尊厳性と平等性を自覚するのであれば、五蘊の共鳴に不協和音が生じた際には、排除し合うのではなく、私たちは互いに平等なものとして歩み寄り、自己をみつめ、他者を理解し、耐え、許し、尊重し合うプロセスを踏まなければならない。互いの（相対的）価値の体系が異なることが原因となり、そこに不協和音が生まれているのならば、自己と他者のそれを明白に理解し、その多元性を認め、命の絶対的価値の上に共存的な相対的価値の体系を創造していかなければならない。命はその本性としてのはたらきは、命の価値を貶めるのではなく、それを認め合い、慈しみ合うことを促している。そのはたらきはこの現実世界において、私たちに理解と許しのプロセスを歩ませることになる。

責務

私たちは、命と命の交わりの中で、五蘊と五蘊の共鳴の中で、愛し合い、憎しみ合い、その結果、そこに何らかのかたちでの命の価値というものを自覚するようになる。私たちは直面する命と実際に交わることによって、その命の価値を理念でもなく、概念でもなく、体験として知り、理解し、慈しむようになる。

もし私たちが、命の本性としての尊厳性と平等性を自覚するならば、実際には五蘊を共鳴し合わない人々や命に対しても、慈悲の心情は発露することになるだろう。命の価値の自覚は矮小化した現実の慈悲のはたらきを深め広げようとする。その自覚は、愛情や幸福などの感情経験を超越し、他の命を慈しみ哀れもうとする態度や意志の形成を促す。命の平等性と尊厳性の自覚は、私たちが他者に示す態度を決定する際の基礎となる。それは現実世界において、私たちの命に向き合う姿勢を決定し、私たちの倫理観や良心の根幹となる。

私たちの良心は、他者との交流を通じて、個別的、社会的、歴史的な（相対的）価値体系の中で形づくられる。他者とのあいだでの五蘊をふるわす交流、また、社会の場に流布した道徳的・宗教的価値体制の影響によって、対面する命の価値を知り、理解するようになっていく。その価値認識は個人の内面において普遍化されて「価値基準」となり、命に向き合う姿勢や態度を生む。他者と交わり合うことによって得られる「個人的経験」および世間一般に流布した「社会的価値基準」は、個人の内面において融合して普遍化され、そこに一貫した倫理観や良心の体系が形成される。

その際、命の本性を見つめる眼差しが深いものであればあるほど、私たちの良心は、より無限定、無条件なものとなる。良心は自我（エゴ）の範囲を超えて、家族、民族、国境、文化、宗教といった限定や枠組みを超え、はたらくようになる。そしてさらに、生命を包括的に捉え、生かし合う命の互恵的な関係性や尊厳性に気づくようになれば、

良心は人類という枠組みを超えても強くはたらくようになるだろう。命の価値を深く広く自覚するようになれば、それに伴い、良心のはたらきは深く広くこの世界に浸透していくことになる。

良心にもとづいた行動を選択し、生活することは、幸福や喜びという感情よりも、人に対しての（あるいは命あるものに対しての）責任や義務として感じられることが多いかもしれない。命あるものが命あるものに対してもたねばならない基本的な責務である。命の価値の自覚にもとづいた行為や行動は、ただ情愛によって動かされるのではなく、情愛に依存しながらもそれを超えて、私たちが同胞に対して実践すべき責務となる。それは命の尊厳性を自覚した力強い意志を形成し、人格の要となる。

人間の五蘊が他の生物の五蘊と著しく相違のあるところは、何よりも高次の想のはたらきであろう。哲学の用語を用いれば、悟性や理性のはたらきである。ゆえに、人間の五蘊において形成される良心の特徴は、それが（想の高次機能である）理性のはたらきによって判断され、行使されるということである。命の尊厳性は、最初は個人的経験としての情愛や愛情の中に感じ取られ、それを人間の理性が汲み取り、判断し、責務を伴う行動の選択となる。命の本性としてはたらきは、情動や感情を経過して、人間理性にまで浸透することになり、命の尊厳性にもとづいた人間精神特有の価値基準や倫理観の形成を促すことになる。

調和

まずそこに、命がある。命の活動は五蘊の活動となり、そこには相対的な意味と価値のシステムが生まれる。五蘊はその個的、社会的、歴史的に展開した相対的な価値体系の中で、自己の欲求を充足しようとして活動する。五蘊はその本能的／精神的な充足活動の中で、喜びと苦悩、希望と挫折、創造と破壊といった対極するプロセスを繰り返し経験しながら、自分自身の存在に意味と価値を見出し、それを維持し、高めようとする。このような自分自身についての意味と価値を志向する活動は、生きること、充実感、幸福感、生きがいをもたらす。それは社会的／歴史的に展開した自我の活動の場に、一貫性と秩序をもたらすことになる。自分の存在や自分の人生に意味と価値を創造しようとする営みは、社会的／歴史的に展開する五蘊の体系に、秩序、調和、統合性をもたらしている。

また人間は自己だけに存在の価値を見出すのではなく、（他の五蘊との関係性において）他者に対しても、その存在の価値を自覚するようになる。命と命、五蘊と五蘊との交わりは、幸福と悲しみ、喜びと苦悩、無知と理解、憎しみと許し、無関心と責務などのような対極する多面的なプロセスを生む。他者の命の価値の自覚は、そのような幾つ

もの対極するプロセスを繰り返し経験しながらも、相対的で多元的な意味と価値の体系を持つ人間と人間のあいだに、秩序、調和、協調性をもたらす。

そして人間は、五蘊の活動において、人間だけに命の価値を見出すのではなく、人間という枠組みを超えて生命の価値を自覚するようになる。その自覚は、人間の利便と利益のために非人間の生命を支配して最大限に利用するのではなく、一切生命とそれを包括する自然の秩序性と尊厳性を尊重した行動の選択を促すことになる。生命の価値の自覚は、一切生命を包括した自然の営みに、秩序、調和、協調性をもたらすものとなる。

統合場の活動は無数の意識場へと分化展開する。そこにおける秩序性の発展の歴史は、私たち人間には物質の進化発展の歴史として理解される。それは生物学的歴史を経て私たちの知るところの意識場へと発展する。統合場の内に分化展開した意識場の活動は五蘊を生み出しそれは自我の活動となるが、その自我の活動の場は「個人の間」から「人間社会の間」へと拡張し、そしてさらに、あらゆる命を包括する「生命の間」へと発展する。自我がそれぞれの場において、命の価値を自覚することは、それら異なるレベルの場に、(命の尊厳性の自覚にもとづいた) 調和と協調性、統合性を生み出すことになる。命の価値の自覚は、現実世界の相対的で有限な多面的価値形成の場に、調和と協調性、統合性をもたらす。それは私たち命の本性的なはたらきであり、その顕現である。

1 岸本英夫「宗教学」大明堂（1961）九九頁